

だいず新品種「ツルムスメ」

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	中村, 茂樹 足立, 大山 鈴木, 和織
巻/号	45巻12号
掲載ページ	p. 572-572
発行年月	1990年12月

研 究 通 報

だいでず新品種「ツルムスメ」

中村茂樹 足立大山 鈴木和織

登録番号：だいでず農林94号 系統名：中育24号 交配組合せ：
中系67号×中育12号

特性の概要 円葉・白花・白毛茸で、主茎長はやや短茎の有限伸育型である。粒は白目・極大粒で、裂皮の発生は少なく、外観品質は良い。成熟期は10月上旬で中生種に属し、強茎なので倒伏が少ない。ダイズわい化病抵抗性をもつが、ダイズシストセンチュウ抵抗性及び耐湿性は弱である。

子実収量は育成地の3カ年平均が10a当り340kgで、「ユウヒメ」及び「トヨムスメ」並に多収である。

わい化病の自然感染による発病率は、抵抗性品種「ツルコガネ」に比べやや高いが、罹病性品種の「ユウヅル」よりは著しく低い。自然感染による被害程度(減収率)も同様の傾向である。

粒大(百粒重)は4カ年の平均が40g以上で、「ユウヅル」や「ユウヒメ」並の極大粒に分類され、粒度(粒揃い)は直径8.5mmのふるいに80%以上が残るので、粒大では「つるの子」銘柄になる。

子実の蛋白含有率は約40%、脂肪含有率は約20%で、ともに「ユウヒメ」並である。豆腐用及び煮豆用加工適性は「ユウヅル」並に評価が高い。また、2粒莢以上の莢が比較的多く、白毛茸で莢実も大きいので、見映えも良く枝豆としても利用できる。

栽培上の注意として特に次のことがあげられる。

(1) ダイズわい化病には抵抗性をもつが、アブラム

シの多発する圃場では、播種時の防除及び生育初期の茎葉散布による防除が必要である。

(2) ダイズシストセンチュウ抵抗性はないので、発生圃場への作付は避けることが必要で、適正な輪作体系のもとで栽培することが大切である。

(3) 極大粒品種なので出芽には十分注意する。耕起・整地を丁寧に行い、覆土後の鎮圧も必要である。収穫時には子実の乾燥に十分留意し、脱穀時はこき胴の回転数をやや遅くするなど、従来の極大粒品種の肥培管理及び脱穀調整に準じて行う。

(4) 環境条件の悪い所はできるだけ避け、合理的な輪作体系に基づいて栽培し、優れた能力を十二分に発揮させる。

育成後記 現在、北海道で栽培されている白目・極大粒品種は「ユウヒメ」及び「ユウヅル」である。両品種とも品質が良く、豆腐、煮豆、菓子、枝豆用として高い評価を得ているが、ダイズわい化病に弱く、耐倒伏性に欠けている。

そこで両品種の栽培地域に適する白目・極大粒でダイズわい化病抵抗性をもった品種の育成を目標に、昭和54年に北海道立中央農業試験場で「中系67号(ツルコガネ)」を母本に、「中育12号」を花粉親として、人工交配した。

その後、選抜を継続実施し、地域適応性、生産力、病虫害に対する抵抗性、加工適性など、新品種として認定を受けるための諸検定試験を実施し、平成2年度に北海道の種苗審議会並びに農林水産省の新品種命名登録審査会で新品種として認定された。「ツルムスメ」の名は両親のルーツがいずれも在来の大粒・良質の「鶴の子」で、銘柄「つるの子」の「看板娘」となるという期待もこめて命名されている。ダイズわい化病に弱い既存の白目・極大粒品種に置き換えて、北海道の大豆作振興に大いに役立つことを育成者の一人として念願してやまない。

育成従事者：中村茂樹・番場宏治・松川 勲・谷村吉光・足立大山・鈴木和織・後木利三・古川勝弘

(北海道立中央農業試験場畑作第一科長)

項 目	ツルムスメ	ユウヒメ	トヨムスメ
成熟期(月・日)	10. 3	10. 6	10. 4
主茎長(cm)	56	59	47
ダイズわい化病	強	弱	弱
倒伏抵抗性	強	弱	強
子実重(kg/a)	34.3	34.5	34.5
種皮色	黄白	黄白	黄白
臍色	黄	黄	黄
百粒重(g)	40.7	40.4	34.3
品 種	上	中	中上

育成地の成績(昭和62～平成元年)。

S. NAKAMURA, T. ADACHI, K. SUZUKI: A New Soybean Cultivar "Turumusume". 農業技術 45 (12), 1990.